

# 世界に例のない日本の時代区分 と江戸時代の特徴

2015年6月22日  
日本史の中の世界一  
育鵬社 他

## ■日本独自の時代区分、政権の所在地に行けば時代が判る

西暦と並行して、日本では日本独自の時代区分があります。古い順に奈良・平安・鎌倉・室町・江戸・明治・大正・昭和・平成・奈良から江戸までは時代の政権があった場所が時代の名前になっています。言い換えれば、それぞれの場所に行けば、その時代の概要が判るのです。奈良時代は奈良に、平安時代には平安(京都)に、鎌倉時代には鎌倉に、江戸時代は江戸(東京)にいけば江戸時代のことはわかるというものです。このような地名による時代区分というのは世界のどこの国にもございません。

## ■明治時代以降、現在までは東京時代と言える。

明治維新後は天皇陛下の一世一元で明治・大正・昭和・平成の元号で呼ばれていますが、いずれも政権は江戸(東京)にあり、一括すると東京時代と言えます。江戸時代の鎖国が終了し、明治の時代に入ると東京が文明開化、西洋文明の取り入れ口で東京から全国に西洋文明は広がっていきました。そして徐々に国風化に成功した時代です。東京は「西洋文明の生きた博物館」です。

## ■中国文明を取り入れてきた奈良・平安・鎌倉・室町時代

奈良時代、平安時代は当時の文明国であった中国北部の黄河文明を取り込み、平安中期にはほぼ受容しおえ(遣隋使、遣唐使)、後半は国風化されました。鎌倉時代は中国の南の長江文明・五山の文化の吸収です。続く室町時代には五山の文化が、既に北京文明を取り込み終えていた京都に接木され、中国文明は京都で総合され、次に国風化されていきました。京都には古くからの御所・神社・仏閣・町屋などが破壊されることなく保存されており、京都は「東洋文明の生きた博物館」と言えます。

## ■江戸時代は日本が中国文明を吸収し終え、学ぶものがなくなり、中国を抜き去った時代です。

中国から輸入したものを勤勉な日本人は国産化し、文化面では能・狂言・茶の湯・生け花・日本庭園・日本料理・着物・歌舞伎・浄瑠璃・浮世絵など、日本の伝統文化はことごとく江戸時代に確立しています。江戸時代の都市のたたずまいが城下町で、外国のどこにもモデルはありません。城下町は日本が中国文明から自立した時代の都市のたたずまいです。城下町は、徳川家康の一国一城令によって、北は津軽藩から南の薩摩藩に至るまで全国にありました。天下一の城下町が江戸です。言い換えると、江戸は、日本が中国文明を抜き去った時代の「東洋一の文明都市」でした。

江戸時代は武士の特権階級に士農工商の封建身分制度が確立されました。幕府は全国に藩を設置し、武士である藩主を任命し地方自治をさせ、農業と教育を奨励しています。地方地方の特産品が目立ってきたのも江戸時代です。江戸を幕府の所在地にふさわしい街とするために天下普請の令がだされ、江戸城の改修、江戸の街の大々的な埋め立て、河川の付け替え、上水道の整備、街道の整備など大型公共投資が長年にわたって実施され江戸は賑わっていました。人・物・金・情報江戸の集まって、人口は急増しました。

キリスト教が領土的野心を持つと判断した徳川幕府はキリスト教を禁止し鎖国に踏み切り、参勤交代制度を実施しました。全国の大名が東京に住むようになり、江戸は全国文化交流の中心地となっていきました。

## ■江戸は世界一美しい「水と緑のガーデンシティ」でした。

250近くの大名が大きな上屋敷・中屋敷・下屋敷を江戸に構え江戸には1000を超える大名や旗本の屋敷があったと言えます。街全体に運河がはりめぐされ江戸は「水の都」でした。また江戸全体の70%が武家地で、その武家屋敷の各々には庭がありました。残りの江戸の3割は町人地と寺社地でした。寺社地はどれも鎮守の杜のような緑に覆われていました。武家地と寺社地を合わせた東京全体の85%が緑に覆われたガーデンシティでした。江戸は、当時の西洋のどの都市もしのぐ「世界一美しいガーデンシティ」でしたが当時の日本人はそのことに、その価値に気づいてはいませんでした。江戸の美しさを残しているのは、当時、日本を訪れた欧米の外国人達です。

安政6年に初代駐日イギリス大使として着任したラザフォード・オールコックは、その3年間の日本見聞記『大君の都』(岩波文庫)の随所で日本の景観の美しさには心底驚いています。それも、たとえば小田原から箱根におよぶ道路の「比類のない美しさ」にさえ目を奪われた。オールコックは、田園と日本農業のありかたにも唖った。「日本の農業は完璧に近い。自分の農地を整然と保つことにかけては、世界中で日本の農民にかなうものはない」と書いています。米国のタウンゼント・ハリスはやはり水田の見事さに驚いたあと、「私はいままで、このような立派な稲、このような良質な米を見たことがない」と兜を脱いでいます。幕末に来たイギリスの女流旅行家、イザベラ・バードが日光へ行ったり、陸路東北まで上って行ったりしているのですけれど、道という道が塵一つなくきれいに掃かれて、絹の布を敷いたようだと書いているんです。また、どの農家の庭先にも花が咲いている。花を所望したら、きちんと切って、お代は受け取らないと。「江戸時代末期、イギリス人が、当時は辺鄙な寒村だった横浜に初めて降り立ったとき、その美しさに息をのんだといいます。手入れの行き届いた田畑を見て、『これは庭か?』と。日本の農業は園芸だ。まったく隙がないと感嘆した。江戸に来て同じです、どこを見ても緑に溢れている。彼らは『江戸はガーデン・シティである、そして日本はガーデン・アイランズだ』と驚いたのです。

また街や村の景観だけではなく日本人の暮らし方についても驚いています。司法省の顧問として明治5年来日したジョルジュ・ブスケも、『日本見聞記』(みすず書房)に、「日本人の生活はシンプルだから貧しい者はいっぱいいるが、そこには悲惨というものはなく」と書き、日本人に欧米諸国の貧困層がもつ野蛮さがなくことに驚嘆しています。大森貝塚の発見でも知られるエドワード・モースが『日本その日その日』(東洋文庫)に、いつもそこいらに置きっ放しにしていた自分の持ち物や小銭が一度も盗まれなかったことを、何度も書いていることは有名です。